# 紫陽花の鎮魂歌

おりのめぐむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紫陽花の鎮魂歌

【Ｎコード】
Ｎ４８１３Ｕ

【作者名】
おりのめぐむ

【あらすじ】
６月に結婚を控えた僕と睦美。実は睦美は亡き兄の婚約者だった。
そんな折、結婚式が近づくにつれて睦美の様子がおかしくなっていく。
死んだはずの兄の姿を見た！というのだ。
そんなはずはないと信じていなかった僕もついに…！

# 序章

「いよいよ3日後ですね。ジューン・ブライド、羨ましいですわ…」
重い空気を感じたのか能面顔のウェディング・プランナーが微笑む。
「ええ、まぁ…」
照れたそぶりをみせながらも僕は横に座る女性を見つめる。
結婚式の打ち合わせの最終日。当日を待ちわびていたはずの彼女は暗い顔をして俯いたままだ。
「それじゃ、行こうか睦美」
空気の悪さをごまかすかのように立ち上がると足早に駐車場へと急ぐ。
プランナーが見送りながらも気遣うように小声で囁いた。
「マリッジ・ブルー、よくあることですわ…」
回を重ねるうちに一言もしゃべらなくなった彼女に対して何かを察したのだろう。
重苦しい雲が広がる中、式場を後にした。
僕、雨月幸次は3日後の6月13日に坂下睦美との結婚式を行なう。
この日にしたのは理由があり、彼女たっての希望でもある。
その出会いは3年前、紹介によって知り合った。
栗色の長い髪、色白ですらっとした美人だが派手さはなく、一歩下がった雰囲気。
控えめで礼儀正しくて清楚という言葉がぴったりなお嬢様というイメージだが、小さい頃に両親を亡くし、苦労してきたらしい。
そんな影の部分を感じさせない上品で綺麗な女性というのが第一印象だった当時、睦美には婚約者がいた。
青年実業家ともいえる経営力があり、周囲からの信頼が厚く、決断力と行動力にたけた人物。

…紹介者でもあった僕の兄、雨月慎一だ。
結婚の意志があるからと交際3ヶ月で婚約すると挨拶がてら紹介されたのだ。
2週間後という強行で婚約式を計画した兄だったが2年前の婚約式当日に事故死。
信じられない悲報に僕は頭が真っ白になった。
当然、睦美も最愛の人を亡くした悲しみと苦しみが襲い、もう叶うことのない夢が突きつけられた。
僕らは空虚化した気持ちを互いにぶつけ合うように分かち合うように支えあうようなり、いつしかかけがえのない存在へと様変わりしていたのだ。
「さ、着いたよ、睦美」
高層マンションが立ち並ぶ一角。駐車場に入り優しく声を掛けた。
俯き加減のまま、終始無言だった彼女は身動き一つしない。
「嫌っ」
降りるように促すと拒否を繰り返す。これは今日に始まったことではない。
結婚式が近づくにつれ、彼女は日に日におかしなことを口走るようになっていた。
奇妙なことに今住んでいるマンションで亡くなった兄を見た…、と。
何故今頃になってそんなことを言い出すのか。僕ははなっから信じていなかった。
マリッジ・ブルー。…ふとプランナーの言葉がよぎった。
僕との結婚が決まり、兄に対して裏切ってる気持ちが芽生えてしまったのかと。
背徳な感情が兄の幻影を見せるまでに追い詰められているのかと。
あと3日、あと3日もすれば大丈夫だ。
不安が惑わせているのなら早く式を挙げてしまえばいい、いつもの睦美に戻るならば。

亡くなった兄の分まで二人で幸せになろうと誓い合う証しのため、2年前の婚約式の日と同じ日を結婚式に決めたのは睦美だ。
兄だってきっと分かってくれてる。
それまでは不安定な彼女を支えなければならない。
とにかく無事に結婚式さえ挙げてしまえばその不安も取り除かれるだろう。
帰らない睦美を自宅に泊めるしかないと車を走らせる。
梅雨入りした空は薄暗く、夕方だというのにすっかり真っ暗だ。
着いた頃にはポツポツと雨が降り始め、彼女の長い髪を少し濡らした。
ぱっと見はどこにでもある1戸建て。2階には僕の部屋がある。
「おっ、お帰り」
玄関に入ると、同居している伯父の声がした。
風呂上りのようで肩にタオルをかけ、乾き始めている短い髪にランニングシャツ姿の伯父は僕と13歳しか離れてない。
シャツから出ている腕は肉付きが良く、鍛え上げた身体でとても40歳に近いとは思えない。
亡くなった両親の親代わりとして兄と僕を育ててくれた人物でもある。
「睦美さんもいらっしゃい」
白い歯を出し、ニカッと愛想の良い笑顔を向けても彼女は無反応。
いつもとは限りなく違う。
「…すいません」
伯父は亡き父の年の離れた弟で人のいい性格でもある。僕は申し訳なく謝った。
「なあに、いいんだよ。…おやぁ、本格的に降りだしたかな?」
不意に雨足が外から激しく響いてきた。
「それじゃあ、ごゆっくり」
伯父が部屋へ戻ると2階にある僕の部屋で軽い夕食を取ることにした。

暗い顔の睦美に気を遣いながら疲れていたのかいつの間にか眠ってしまった。
どれくらい経ったのだろう。少し肌寒く感じて目を覚ます。
雨の方は相変わらず降り続いていたようでその雨音は留まる事を知らない。
腕の中で眠る睦美を起こさないようにそっと部屋を出る。
何か温かいものが飲みたくなり、用意しておこうと台所へと向かう。
お湯を沸かし始めると窓に打ち付ける雨の激しさに驚く。
ますます雨足は激しくなる一方で嵐の予感さえもする。
しばらくすると遠くから雷の音が響いてきた。
用意したお茶を運び始めると後方でピカッと稲光が走る。
「きゃあああああ〜〜！！」
悲鳴と共に地に響くような雷鳴が重なった。
「睦美？！」
嫌な予感がし、慌てて部屋へと向かう。
外からの稲光のみが照らす薄暗い室内。部屋の隅で怯えている彼女の姿が目に入る。
「どうしたんだ、どうしたんだ？　睦美！！」
髪の毛を掻き乱しブルブルと震えていてただならぬ様子は明らかだ。
そして声こそ出さず、震える指先で僕の後方をさす。
雨音と雷鳴が響き渡る中、恐る恐るその方向に振り返る。
カーテンを閉め忘れた窓の上部に張り付いた何かが見えた。
逆立ちしているかのようにだらりとぶら下がったその物体は、
稲光とともにはっきりと映し出されたシルエットは、
確かに兄、雨月慎一の姿だった――――。

## 依頼

「御祓い、ですか…」
目の前にいる人物が抑揚のない、低い声を発した。
静まり返った和室の一角で僕は真剣に訴えていた。
衝撃的な一夜を迎えた出来事は否定できない事実だからだ。
稲光が照らし出した窓の隅にだらりと垂れ下がったモノ。
それはまるで2年前の酷い遺体を思い出させるかのようだった。
大破した車とガラスのかけらで輝く血の海の中にある物体。
凄まじい衝突事故だったらしく、現場に駆けつけた僕らは思わず目を背けた。
運び出されたその姿は人の形はかろうじて残ってはいたがそれが兄だとは思えないものだった。
身体はあらぬ方向へと曲がりつつ、強打により腫れわたり、切り傷によって血の嵐。
婚約式ですぐに着替えられるようにと下準備していた白いワイシャツは赤いハギレと化。
頭は変形しており、裂けた皮膚、ただれた痕。既に見知った顔は変貌を遂げていた。
昨晩の物体はあの時の衝撃をそのまま目の当たりにしたかのように。
いや、それより酷い恐怖を与えられたのかもしれない。
頭部と片腕のみがぶら下がるようにこちらを覗き込み、垂れ下がった手に添うようにぽたぽたと血が流れ落ちていた。
頭を覆い隠すように固まって張り付いていた髪が豪雨と雷光で露わに映し出される。
強打したかのような潰れて顔のパーツすら分からないほど腫れあがった顔がはっきりと。
既に睦美は気を失っていた。

雷鳴が起こる度にそれが兄だと確信させられる。
突然、張り付いた血だらけの髪の隙間からカッと目を見開く。
もう身動きすら取れず、呼吸さえもうまく出来ずにいた。
次の瞬間、中へ入れろといわんばかりに激しく窓を叩き出す。
そこからもう記憶がない…。
「幸次君、幸次君！」
伯父に揺り起こされ、気が付いたら朝になっていた。
花屋の朝は早い。僕の家は祖父の代から受け継がれた花屋で正面が店舗、裏手が自宅という造りになっており、当たり前だが今日も営業を行なっている。
いつものように時間になっても起きてこない僕を不審に思い、散乱した廊下を見て変だと感じた伯父は半開きだったドアから中を覗いたらしい。
「何か、あったのか…？」
ただ事ではないなという表情で伯父は心配そうに声を掛けてきた。
話し出そうとした矢先、例の窓が目に映る。昨日の嵐が嘘のように晴れ渡り、白々と明るい。
あの残像のカケラすら、なかった。言葉をなくした僕は日常へと引き戻されていた。
眠ったままの睦美を残し、僕は伯父とともに開店準備のため、店へと赴いた。
花屋は自宅の他に3店ほど支店を抱えているが、この店は伯父と二人でまかなっている。
水替えや水揚げの最中、昨日の出来事を事細かに話したが、伯父は信じられないと驚きを隠せなかった。
それはそうだろう。僕も睦美が言っていたことが信じられなかったからだ。
しかし、それを目の当たりにしてからは話が違う。
不意に何かを言いかけた伯父は言葉を飲み込んだ。
僕たちのいきさつを全て知っているため、言ってはいけないと判

断したのだろう。
「兄が反対している…かもしれない…」
「幸次君、それは…」
「いいんです。僕もそれはうすうす気づいてました」
睦美が見たと言ったことを信じられなかったのではなく、本当は信じたくなかったのだ。
心のどこかで罪悪感があったのは嘘ではない。
けれど、兄は既に死んだ人間。今更どうしようもない。
式まであと2日。このままこの問題を放置して置けない。だから決意した。
「御祓いだなんて…。きちんと供養してるんだぞ。そこまでしなくても…」
伯父はうつむいた様子で言葉を濁したが、決心は変わらなかった。
すぐに藁をも掴むおもいで片っ端からあたり、知り合いに無理を言って紹介されたその筋の人物。
地域では有名で由緒正しく代々から続いてる高名な霊媒師だとか。
午後から店を伯父に任せ、教えられた住所を片手に僕は一人で訪ねた。
「それにしても、まだ着かないのか」
長い白壁が連なり、ようやく門が見えた時にはほっとした。
瓦付きの立派な門に達筆な筆字で『御明寺』と書かれた大きな表札が目に入る。
門扉の横に勝手口らしい小さな戸もあり、そこにインターホンが備え付けてある。
鳴らそうと指を伸ばしてみると柄にも無く緊張していて震えている。一呼吸して押す。
呼び鈴が3回鳴った頃、男の低い声で「はい」と返事があった。
しばらくすると小さい方の戸が開き、予想外の人物に息を呑む。
黒髪ですらっとした制服姿の青年が出てきたのだ。
「どうぞ」

長く伸びた前髪から見える切れ長の瞳で僕を促した。
砂利石が敷き詰められた庭を進むその途中、いろんな草木が目に付く。つい職業柄、目に入るのかもしれない。もちろんこの季節の花、紫陽花も植わっていた。
一瞬、目を奪われると不意に睦美のことが想い浮かぶ。紫陽花が好きと言っていたのが印象的だったからだ。
『色が変化するのに魅力を感じるの。赤だったり、青だったり、紫がかったり、おしゃれでしょ？』
あれだけ魅力的に微笑んでいた睦美が枯れそうな状態になっている。
とにかくこれ以上、彼女のためにも僕のためにもケリをつけるべき時が来たのだ。
物音一つしない長い廊下を歩き、イ草の香りが残る畳が印象的な和室へ案内された。
緊張した面持ちで待っているとお茶まで運んでくる彼に驚いた。
「今、家のものが出払っていて…」
確かにほぼ強引に面会をお願いし、押しかけたとはいえなくはない。
一分でも一秒でも早くどうにかしたかったため、気だけが急いていた。
相手の都合なんて眼中になく、すぐにでも成仏させてくれるものだと思い込んでいたのだ。
「まいったな。すぐにでも先生に会えると思っていたのに…」
「ご用件なら代わりにお伺いします。ご足労願ってますので」
学校帰りのままなのか制服姿だがその雰囲気は大人びた感じだ。
とはいえ、如何にも学生らしい男にこの件に関して話すのは…とためらったものの、あまり時間がない。
いつ戻るか分からない霊媒師を待てないまま、仕方無しに語り始める。
ふと気づけば障子の向こうから雨音が響いてきた。いつのまにか

降り出したらしい。

「残念ですが、お断りさせていただきます」

御明寺貴雄と名乗った高校生はまっすぐ僕を見つめ、断言した。

予想だにしない答えにカッとなる。

霊媒師とはどういう関係者だか知らないが表情を一つ変えず、聞き終わったかと思えば何だか話の内容からして大したこと無いだろと言わんばかりの雰囲気。

…こいつは一体何なんだ？　これだから御用聞きがわりのガキは困るんだ。

学校行ってるような甘ちょろいガキには昨日のような体験をしてみないことには判りっこない。

あんな風に事故死した兄がリアルに現われることなんて。

声を荒げそうになるのをぐっと堪える。

…まあいい、僕も大人だ。落ち着くんだ。

きちんとこの件に関して伝えてもらえればいいではないか。

湧き出しそうになる怒りを堪えてこそ大人の対応だ。

「とにかく霊媒師の先生にきちんと伝えておいてくれないか。こちらに戻り次第、御祓いの方に来て欲しいと」

「…お言葉ですが、伺うまでのことは無いと思います」

顔色一つ変えず、遮るような言葉を口にする彼に困惑する。

何を言い出すかと思えば、今度は来る必要が無いだと？

全く冗談じゃない。意を決してこんな所まで訪ねて来たのに水の泡になってしまう。

睦美だってもっとおかしくなったらどうするんだ。

堪えきれない感情がついに爆発した。

「分かってるのか？　さっきから言ってるように時間が無いんだぞ。とにかく急いできてくれないと困るんだ！」

相手が高校生ということを忘れ、怒りを露わにし、ムキになって捲くし立てた。

名高い霊媒師には会えず、来てもらえないなんてどうしろっていうんだ！
現物を見てしまったのにどうにもできない素人なんだぞ、こっちは。
最後にはどう発言したのか僕自身さえ覚えていない。それほど切羽詰っていた。
「…分かりました。それでは明日の昼以降、お訪ねさせていただくようにいたします」
ため息交じりの返答が鼻についたがこれで一安心といったところだ。
変な空気を一新してもらって結婚式に望める。
「それでは明日、くれぐれもお願いしますとお伝えください」
相変わらず薄暗い空から止む気配はなかった。
が、降り続く雨の帰路は意外にも軽やかだった。

## 回想

明日。明日なれば全ての不安から解消される―――。
一抹の不安から解消され、安心感からか気分が高揚し、焦る気持ちが加速する。
これできっと彼女も安堵するに違いない。
僕はお払いのことを知らせようと待たせてある自宅へと急いだ。
営業中である店の方には寄らず、真っ先に自分の部屋へと駆け上がる。
「睦美、安心してくれ！」
勢いよくドアを開け、一瞬にして身動きが取れなくなる。
室内は足の踏み場が無いほど物が散乱しており、部屋の片隅でシーツに包まっている睦美がいた。
何かあった…というのは明らかだ。
「…睦美。大丈夫か、睦美？」
必死で問いかけるが、がたがた震えたまま何も答えない。
手をかざしてみるものの、一点を見つめたまま、心ここにあらずで放心状態だ。
落ち着くまで待つしかないと僕は荒れ果てた部屋を片付け始めた。
「…変な、声が…。が…、…で」
ふと呟くようにか細い声が聞こえてきた。
「こ…、晃一、が…、いやぁー！」
不意に我に返って思い出したのか兄の名を口にし、睦美が髪をかき乱す。
昨夜の惨劇同様に再び悲惨な姿の兄を見てしまったんだ、と察しがついた。
もうここにはいられない、かといってマンションも保証は出来ない。
今はどうにもできない現実に苦悩する。

どうしていいのか分からない。けれど明日までどうにか乗り切れればいい。
とにかく部屋から離れようと逃げ出すことしか思いつかなかった。
駐車場に向かい、急いで車に睦美を押し込み、僕も乗り込む。
行き先なんて決めていない、ただ当てもなく車を走らせる。
重い雲に覆われた空はあっという間にあたりを暗くしていた。
ウロウロしている内に黙々と時間だけが過ぎていく。
幸いにもずっと降り続いていた雨は小休止していた。
真っ暗になった道路で不意にネオンが目に付いたビジネスホテル。
このまま、闇雲にうろうろするだけじゃどうしようもない。
仕方が無い、今夜は彼女をここに泊まらせよう。
そう決めるとすぐにチェックイン。
シングルルームの一室に案内され、彼女を落ち着かせる。
「明日になれば御祓いが行なわれるからそれまでは…」
不安がる睦美に僕はそっとお守りを握らせた。
「これを持っていれば絶対に守ってもらえるから…」
どうにか納得させた彼女を置き、僕はホテルを後にした。
本当はそばに付いててやりたかったのだが、明日から数日、自宅のお店が休業せざるを得ない。
僕らの結婚式のためとはいえ、生花なので長持ちしないから支店に移動させなければならないのだ。
その作業を午前中に終え、午後からは御祓いという予定となる。
睦美のそばに居てやれない代わりにと渡したお守りは僕が亡き母から貰った大事なもの。
いつも肌身離さず持ち歩いていたもので今までにいざっていう時には助けられた代物だ。
今度は睦美を守ってくれ！　兄さん、せめて来るなら僕に来い！
自宅に戻ると風呂上りの伯父の姿があった。
「随分と遅かったな。…そういえば睦美ちゃんは部屋にいないよう

だが？　夕飯にと声を掛けたんだが…」
　お払いの話を決めてきてから店に顔も出さずそのまま出て行ったきり、伯父には何も知らせてないことに気づいた。
「実はいろいろあって彼女は安全な場所へ泊めてるんです」
　詳しくは説明しなかったが彼女が居ない旨を話した。
「へぇ～、そうか。大変だったんだな。店の方にいたけど何も気づかなかったよ。まあ、途中で配達やら何やらで空けちまった時間があるからな。幸治君、手助けできずにすまなかった。…それで、例の件はどうだったかい？」
　僕が店を空け、結果一人で店の方を切り盛りしなければならなかった伯父さんに睦美のことまで手が回らなかったのは当たり前だ。
　それなのに伯父は僕たちの心配までしてくれるとは。
「明日の午後、御祓いに来てもらえることになりました」
「まあ、そこまでしなくてもと思ったが…。そうは言ってられない事態ってことか。その手の話はよく分かんねえが深刻なんだな」
　伯父は頭をかきながら神妙そうに言った。
「伯父さん、今日は昼から休みを貰ってすみませんでした。明日はきちんと手伝いますから」
「なぁに、幸次君。明日はゆっくりと寝てればいいさ」
「そんな訳にはいきません。伯父さん一人にばかり迷惑を掛けられないです」
　伯父はワハハと白い歯を見せて笑い、
「何言ってんだ、君は主役なんだぞ。本番でぶっ倒れたら仕方がないだろうに…。ともかく疲れただろうから早く休んだらいいさ。そうそう、残り物で悪いがワシの作った飯もあるからよければ食べてくれ」
「ありがとうございます。遠慮なく頂きます」
　先に寝るからと伯父は首を回しながら部屋へ入っていった。
「まずは睦美に…と」
　一息つく前に僕はまず睦美に携帯からホテルへ家に帰り着いた旨

を電話した。
落ち着いた様子に安堵した後、少し雨に濡れた身体を洗うため、そのまま浴室へと向かう。
温かいシャワーが全身を包み込み、ようやく一息がつけた気がした。
風呂上りに台所へ寄り、残り物…と称した伯父さんの料理をしっかりと堪能した後、部屋に戻った。
睦美がいなくなり、ガランとした室内が寂しくさせる。
ふと窓が目に入り、さっとカーテンを閉めた。
―――兄さん、死んでまで僕に劣等感を与えないでくれ。
そんなことを願いながら、脳裏に兄の面影を浮かべる。
一つ違いの兄は神童と呼ばれ、頭がよく、スポーツも万能だった。
それに引き換え僕は落ちこぼれでどうしようもなく、よく父にしかられていた。
父は若くして部長にまで登りつめたのだが、僕が中学に入った頃、祖父の死をきっかけに花屋に転職した。
店は伯父と父とで経営していたが、父は才能を生かし、花屋を拡大し、支店を出すほどにまでにした。
ところが僕が高校生の頃、父の居眠り運転で両親が亡くなってしまった。
両親を亡くしたショックは大きかったが、その反面、父に叱責されないという安堵感も芽生えていた。
それもつかの間、学校で先生や友人、女生徒たちが兄と僕をはっきりと比べるようになっていた。
兄の評判が良ければ良いほど僕に劣等感を与え続けていたのだ。
僕は兄が憎くて憎くてしょうがなく、けれど、出来の悪い僕はどうしようもなかった。
その中で唯一平等に扱ってくれたのが伯父、一人だけだった。
伯父は父と随分と歳の離れた弟で、１２歳も違った。
父は大学卒業後、一流企業に就職したが、伯父は祖父の元、若い

ながら花屋を手伝っていたらしい。
『オレはデキが悪いけど、体力だけは自信がある』と口癖のようにいいながら一生懸命、仕事をしていた。
祖父の死後、花屋に転向した父をあっさりと受け入れ、両親の死後もしっかりと僕らの面倒をみてくれたいい人だ。
そんな伯父と兄が口論になっていることがあった。
大学卒業後、父の跡を引き継ごうと店に就職した兄は才能を生かして、花屋を更に大きくしていった。
売上も2倍以上に伸ばし、経営も兄が握っていたようなものだった。
その頃、睦美と付き合い始め、彼女と住むために彼女名義にしてマンションを購入。
彼女の気を惹くためなのか高価な時計を身につけたりなど急に金遣いも荒くなった。
不安になった伯父はそのことについて兄に注意したのだ。
『俺が稼いだ金をどう使おうが、とやかく言われる筋合いはない』
『しかし、晃一君…！』
『今までの倍以上、稼いでるんだ。経営に何の問題も無い。それにまだ利益を出すだけの自信がある。父が死んで何も出来なかったあんたより稼ぐだけのな！　おまけにあんたは…』
僕はその場を目の当たりにし、あまりの暴言に耐えられなくて言葉をさえぎった。
『兄さん、あんまりじゃないか！』
少なくともお世話になった経緯があり、今も心配して注意してくれた伯父にそんな暴言を吐くとは…！
『お前は黙ってろ。何も知らないクセに！』
いつものように優越感を醸しだして押しの強い口調で言う。
『けれど、兄さん！』
『いいんだ、幸次君。もういいんだ』
物分りのいいように伯父は僕をたしなめた。

『晃一君にもすまなかった。余計なことを言ったようだ…』
『お、伯父さん…！』
僕はあんまりだと思ったが、この件は伯父が引き下がったことで片付いた。
ますます兄の存在が憎くてたまらなかった。
それからも兄の暴走は止まらなかった。
伯父の知り合いの伝手を使い、オープンカーまで購入し、睦美とデートを繰り返した。
あとから知ったが睦美は少し派手な車…と敬遠しているようであった。
そして彼女との婚約が決まり、これまた高価な指輪を購入した。
婚約式までも開くといい、せめて会場はマンションでと彼女が懇願したらしい。
婚約式前日。
伯父からの提案で店の花をマンションに飾って驚かせてやろうと僕と睦美に持ちかけた。もちろん、兄に内緒で。
なんて人が良いんだと思いながらも賛成した。
そして当日。
閉店間際にわざと兄を遠方地へ配達に行かせ、そのまま現場にくるように伝えた。
兄は配達用に相応しくはないが、あのオープンカーで出かけた。
配達用は僕らがマンションに運ぶためで使っていたからだ。
準備も整い、あとは兄が到着するのみだった。
そして悲報があったのだ！
当時、兄が亡くなったというショックは大きかったものの、日にちが経つに連れて心の奥にかかえていた劣等感が消えていくのを感じた。
そこに落ち込む睦美が僕の心にどんどん入ってきた。
『晃一より優しい…』と睦美に言われ、だんだんと兄への優越感も生まれてきた。

兄から睦美を紹介された時、その美しさに目が奪われたのだがそれを遮るかのように兄の存在が大きかった。
たまたま店で2人で話していてもいつも妨害され、睨まれたのだ。
いつか奪ってやりたい！　と心のどこかで思ってたのかもしれない。
兄が亡くなってから僕は彼女に対して積極的になっていたのだ。
そして結婚するまでに至った時、何故だか「勝った！」と思ったのだ。

それなのに、今更―――。
睦美は俺のものだと言わんばかりの仕打ち。
解消されていった劣等感を増幅させる出来事。
『消えてくれ！』
それが僕が今願っている、ただ一つのこと。

## 豹変

「しまった、寝過ごした…」
気が付くと、朝が来ていた。
…いつの間に眠ってしまったのだろう。どうやら疲れていたのか、爆睡したらしい。
時計を見ると朝の１０時過ぎ。慌てて起き上がる。
急いで階段を駆け下り、伯父の部屋に向かって声を掛けた。しかし返事がない。
仕方がないので戸をそっと開けてみることにした。
「伯父さん？」
開けた隙間からそっと部屋の中を覗いたがカーテンも閉めっぱなしのようで真っ暗でひと気がない。
念のため店の方に行ってみると、ガラ～ンとした空間が広がり、生花は全て片付けられていた。
もしかして伯父一人で支店へと出かけたのかもしれない。
配達用の車もなく、どうも眠り込んだ僕に気を使ったようだ。
「参ったなぁ…」
自分の不甲斐なさに憤慨しながらも慌てて伯父の携帯に電話をかける。
「あぁ、幸次君か。おはよう。どうした？」
少し驚いた様子で伯父が出た。何かの作業中なのか少し電波が届きにくい。
「すいません。どうも僕、寝過ごしたみたいで…」
「いや、疲れてたようだからいいんだよ」
「本当にすいません。また伯父さんに迷惑掛けてしまって…」
いつものようにワハハと笑ってる声が受話器越しに響く。情けなくてしょうがない。
「なぁに、気にしない。心配しなくていいんだよ」

「すいません…」
僕はただ謝るしかなかった。こんな時だからこそ、寝過ごすなんて恥ずかしい。
「まあ、昼ぐらいには戻るから。気にするなよ、それじゃあな」
プッ…と電話が切れた。本当にいい人だ、つくづく思う。
そうこうしている内に１０時半を回っていた。
チェックアウトも近いと僕は慌てて睦美を迎えにいく準備をした。
「睦美。僕だよ、睦美」
到着前に携帯へ電話したが通じなかったので嫌な予感がする。
部屋の番号を確認し、息を切らしながらノックし彼女に声を掛ける。けれど、何の反応も無い。
音が届かなかったのかともう一度叩こうとするとオートロックの分厚いドアが完全に閉まってないのに気づく。
隙間に何かが引っ掛かっているおかげでノブをまわすと簡単にドアが開いた。
素早く部屋の中に入ると僕はただ驚くしかなかった。
ビジネス用の在り来たりな狭い室内にはベッドと壁際に据え付けられた長机があるだけのシンプルさだったはずが、見事にも変貌を遂げていた。
じゅうたんを敷き詰めてあった床は照明に反射してキラキラとしたものが舞い散っていた。
おそらく室内に飾ってあった絵画や鏡、ガラスコップなどが投げつけられ、破損したためだろう。
備え付けの電話機は激しく叩き壊されて中の部品が飛び出し、引きちぎられた電話線がだらりと伸びていた。
「睦美…？」
ベッドと窓との狭い間にシーツを纏った塊を見つけ、一歩踏み出す。
かつっと硬いものを踏んだ気がして足元を見ると携帯電話はその面影をすっかり失っていた。

「むつ…」
視点の定まらない放心状態の彼女の長い髪はぐちゃぐちゃに乱れ、恐怖で顔は青ざめており、泣いて暴れたのか腫れたまぶたと擦り傷で汚れていた。
シーツもところどころ血まみれで破れた跡もあり、手や足は怪我で血だらけだった。
―――兄さん、いい加減にしてくれよ！
睦美を抱きしめながら心の底から本当にそう思った。
しばらく経っても放心状態の彼女を車に乗せ、僕らはビジネスホテルをあとにした。
あの現状はどうしようもなく、ただ弁償するしか方法はなかった。
今すぐにでもお詫びはしたかったのだが、破損具合が分からず、お払いの時間が迫ってきて待てずにいた。
住所、氏名、電話番号、携帯番号の全てをホテル側に伝え、とにかく謝って謝って全ての請求を僕にするようにお願いした。
何とか承諾を得てほっとしたのもつかの間、すっかり時刻はお昼を過ぎていた。
自宅に戻ると伯父さんが玄関から出てきた。
「…幸次君だったのかい？」
少しやつれた様子が窺える疲労を隠せない顔だった。
僕のせいでと申し訳ない気持ちでいっぱいになった。
「まだ、御払いの先生は来てないよ」
助手席に乗ったままの睦美の様子を怪訝そうに窺いながら言った。
「さ、睦美。降りよう。もうすぐ御払いの先生も来るし」
ずっと無言のままの彼女にドアを開け、降りるように促したが、じっとしたままだ。
「さあ、睦美」
腕を掴みかけたが正気を取り戻したかのように突然、パンッと僕の手を払い、
「何よ、こんなもの！！」

急に声を荒げて、勢いよく何かをポイと投げつけた。
投げ出された物体が地面に跳ね返り、飛んでいく。
「あっ…！」
僕は投げられたものが何か分かった。お守りだ。
慌てて追いかけて拾おうと手を伸ばした。
が、僕より先に拾う手が見えた。
その手の主はいかにも学校帰りだという姿の、御明寺貴雄だった。
「どういうことだ？」
とっさに彼に問いかける。
今日は御払いを頼んだ。なのにお払いの先生ではなく、制服姿のヤツが現れた。
「どうした？」
異変に気づいた伯父が声を掛けてきた。
「いや、あの…」
僕は訳が分からなくて返答に困ってしまった。
「考査期間中でこのままこちらへ向かった方が早いと思い、このような姿ですいません」
初めて話した時と同じく低い声で語った。
いきなり狂ったかのような甲高い笑い声が響き出す。
驚いた僕は声の主である睦美に近づいた。
「笑わせないでよ。何が御払いよ。いい加減にしてちょうだい！」
今までにない激しい口調で彼女がまくし立てる。
「大体、あのお守りだってちっとも役にたたなかったじゃないの！」
その顔はさっきほどまでの放心状態が嘘だったかのように殺気立ち、血走った目が鋭く光った。
「もうこれ以上、アタシを巻き込まないで！」
怒鳴りながら車から飛び出し、僕をドンと押し倒した。
「む、睦美…？」
突然の豹変振りに僕は愕然としながらも彼女を見上げた。
「アタシはあんたなんかこれっぽっちも愛しちゃいないのよ。今ま

ではいい生活が待ってるからと我慢してたけど、限界。ホント、あんたの不甲斐なさには呆れたわ。あんたは愛する女性さえ、しっかりと守ってやれないなんてね」

伯父とヤツの視線をすごく感じる。何がどうなってるのか分からない。

「これ以上、このままあんたといると本当にアタシがどうにかなるわよ。晃一と違っててんでお頭が弱いんだから！　冗談じゃないわ！」

睦美はもう僕の知っている彼女ではなかった。

おとなしくて控えめで笑顔の柔らかい女性。

そんな彼女の姿は、もうない…。

「あんたとの結婚なんて辞めてやる！　晃一だってこれで満足でしょ！」

キッと僕を睨んだ後、乱れた髪をかき上げ、つかつかとその場を去っていく。

僕はもう何が何だか分からなくなっていた――――。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4813u/

---

紫陽花の鎮魂歌

2011年11月30日23時54分発行